

全国大学史資料協議会2013年度全国研究会 テーマ「大学史資料の活用と展示」をめぐって

東亜同文書院大学記念センター事務室 森 健一

はじめに

2013年10月10日、全国大学史資料協議会が主催する2013年度全国研究会が明治大学駿河台キャンパスにて行なわれた。筆者は東日本部会会員として参加し、本学の大学史資料の活用に資する報告を聞くことを目的として参加した。

本研究会の今年度のテーマは「大学史資料の活用と展示」とし、最近注目すべき展示を行った専修大学、早稲田大学、関西大学による報告がなされた。

なお、本テーマを取り上げた理由について、発題者の小松修氏¹⁾によると、大学史展が増加傾向にあるのに対し、今まで全国研究会においては「大学史資料の公開と活用」²⁾、「大学史の社会的使命」³⁾等の一報告として行われてはいたが、直接展示をテーマとしたことはなかったこと、今後、多様なテーマの大学史展の開催が予測される中、収集・調査した資料を活用してどのようなテーマを設定するのか、また大学の理念や教育方針を学内外にいかに効果的に発信するのか、さらには観覧者に資料をどのように提供するか等、大学史展についての方法やあり方等の理念的な検討を深めることが必要だとしたことが、発題にいたる理由だとした。

3大学による報告内容は、以上の課題に対する具体的事例として取り上げられ、それぞれ、「地域と連携した展示」(専修大学)、「戦時期の展示」(早稲田大学)、「展示を通しての自校史教育」(関西大学)という、まさに今回のテーマで

ある「大学史資料の活用と展示」をめぐるものであった。

各大学が実施にあたって直面した問題は、本学の大学史活動でもあてはまると思われ、その解決へ向けた取り組みは示唆に富む内容であった。そのため、ここに紹介し、あわせて本学の大学史活動について若干の考察を試みる。

I. 3大学の取り組み

1. 報告①「地域と大学を結ぶ—大学史資料活用の広がりを探して—」(専修大学)

瀬戸口 龍一氏(専修大学総務部大学史資料課)

《報告内容》

はじめに

1. 大学史資料の活用とは？
2. 広報活動と研究活動
3. 地域に残る史資料の調査
 - (1) 教員との連携
 - (2) 学内職員組織との連携
4. 共催展の具体例—メリット・デメリット—
 - (1) 多摩区との連携
 - (2) 千代田区との連携
 - (3) 地域博物館との連携
 - (4) 系列校との連携

おわりに

(発表用パワーポイントをもとに筆者が作成)

専修大学の報告は、展示を通じた地域における大学史活動について取り上げたものである。専修大学では、展示室がなく、また自校資料がほとんどない状況でも数多くの多彩な共催展を実施してきた。ここでは3つの事例を紹介するが、どれも共催を通じた大学史活動には、地域や社会との連携という視点がみられ、その企画力と行動力は学ぶべき点が多い。

まず、事例紹介の前に、各共催展の実施に伴い共通した問題と、それを解決するために取り組んだ活動を述べる。その後、具体的な事例を取り上げることとする。

実施にあたっての問題として、おもに予算の問題と、収蔵資料が少ないという2つの問題がある。これらの問題に対して、予算については、右のパワーポイント資料に挙げたような大学が抱える問題⁴⁾と関連させ、それに対する解決策の一つとして提案することで、予算の承認を得ている。つまり、大学経営戦略の一環としての大学史の地域活動の必要性を大学に対して提案し、承認を得ていることになる。

次に収蔵資料がほとんどないという問題については、学内職員組織との連携によって情報を集め、資料の収集および共催相手を探している。とくに地域での活動を実施する際には、校友課(全国にいる卒業生の取りまとめ)、育友課(全国にいる保護者の取りまとめ)、入学センター(全国にある高校への訪問等)、企画課(川崎市多摩区との連携の取りまとめ)、総合企画課(千代田区との連携の取りまとめ)、エクステンションセンター(社会人向け講座の取りまとめ)とい

近年の専修大学が抱える問題
<ul style="list-style-type: none"> ・18才人口の減少による受験者数の減少 ・経済不況による地元志向の高まり ・卒業生からの寄付金の減少 ・専修大学というブランド力の低下 ・就職率をいかにしてあげるか など
↓
<p>こうした大学経営の問題の解決の一つとして、大学史の地域活動が必要という明確な理由付けを行う</p>

当日のパワーポイントより引用

う、地域とのかかわりがある部署と連携し、資料調査や共催展実施の糸口として依頼している。

このような方法により、予算の問題と展示資料の収集および共催に関する問題を解決しているが、そのほかにも実施に関連して、次の5点に留意している。

- ①大学関係者(校友課、育友課など)への支援依頼。
- ②共催にあたって展示対象物の徹底的な資料調査。なお、資料調査前には現地へ赴き、遺族の方に面談したりするなど、さまざまな準備をした上で調査を実施。
- ③シンポジウムも必ず同時に実施。
- ④地元の教育機関、地域新聞への後援依頼。
- ⑤展示にあたって調査した結果などを紀要などに掲載。

次に事例として、3件の共催展を紹介する。

■事例(1) 三重県桑名市博物館・専修大学・一橋大学 共同企画展「駒井重格の軌跡 ～専修大学の創立者、一橋の名校長～」

展示期間 2009年12月12日～2010年1月24日

展示場所 桑名市博物館(三重県桑名市)

本企画展は、専修大学の創立者に関する地方展示の第一弾である。専修大学としては初の共同開催・学外開催の展示であり、かつ国立大学・私立大学・自治体が連携したという点でも画期的な展示となった。なお、駒井重格という人物は、専修大学の創立者であると同時に、高等商業学校(現在の一橋大学)の校長であったため、一橋大学との共催が実現した。

共催展示における工夫点については、当博物館の展示スペースが1階、2階とあるため、1階では駒井重格に関する企画展を行い、2階では専修大学と一橋大学の両大学史の展示を行った点である。これにより、専修大学としての地方における広報活動を実施することができた。

■事例(2) 黎明館・専修大学合同企画展「日本の財政学を築いた薩摩藩士～専修大学創立者・田尻稻次郎の生涯～」

展示期間 2011年11月22日～2012年1月9日

展示場所 黎明館(鹿児島県博物館)

本企画展は、黎明館と専修大学による「知の発信」として鹿児島が生んだ郷土の偉人・田尻稲次郎の生涯を紹介するとともに、田尻の生涯を通して、日本近代という時代において財政学という学問が国家形成に果たした役割を紹介した内容となっている。

本企画展にて画期的であったのは、県の博物館との共催展であったと同時に、会計検査院にも後援依頼をするという手法をとったことである。こうした展示会に会計検査院へ後援を依頼することはほとんどないため、初めての事例となった。後援依頼の理由について、田尻稲次郎という人物は、創立者であると同時に、かつて会計検査委員長を務めたことがあり、そして大きな功績を残したことから依頼するにいたった。依頼を受けた会計検査院は快く引き受け、それにより展示資料の面については会計検査院に飾ってある鏡像や、院長室の歴代院長の絵を借りることができた。また、会計検査院院長が鹿児島まで足を運び、来館する機会にも恵まれた。

この企画展により、地域だけではなく会計検査院を巻き込んだかたちで開催できたことは、専修大学にとって一つの新しい試みであった。

■事例(3) 石巻市・石巻専修大学・専修大学共同企画展「唱歌斉唱—『故郷』の作詞者・高野辰之の生涯—」

展示期間 2012年12月1日～12月16日

展示場所 東京エレクトロンホール宮城(宮城県民会館)

本企画展は高野辰之を取り上げたものである。高野辰之は、東日本大震災発生以降もっとも多く歌われたといわれる「故郷」のほか、「朧月夜」の歌の作詞者として有名な人物であるが、専修大学および石巻専修大学をはじめ、全国100校を越す校歌の歌詞も手掛けた人物でもある。今回、校歌の作詞者をここまで大々的に取り上げた理由については、東日本大震災の発生以降、入学者数が激減している問題を抱えた石巻専

修大学等、震災に対する専修大学としての復興支援という意味が大きくあった⁵⁾。

本共催展では、これまでの共催展とは異なる3つの試みを行っている。

①オープニングセレモニーの実施

セレモニーを実施することで、地元の新聞に取り上げられ、宣伝につながった。

②記念総会の実施

総会の実施にあわせ演奏会を開催し、専修大学と同様に、高野辰之による校歌というつながりで該当する高校に参加を働きかけた。そのほか、地元の方々(ママさんコーラスや小学生、中学生等)へも参加を働きかけた。

③復興応援歌の作成

記念総会にあわせ、専修大学、石巻専修大学にて復興応援歌を作成した。なお、歌詞は石巻市の小学校から募集し、126点もの応募作品の中から一番良い歌詞を採用した。

そのほか、復興応援歌の作成活動については、石巻専修大学の新学部として創設された人間学部の教員に依頼し、これを新学部の広報活動につながるようにした。

以上の取り組みにより、本企画展は、単純に高野辰之という人物の展示だけではなく、地域というものを巻き込み、かつ石巻専修大学の新学部の広報にもつなげたという事例であった。

最後に、共催展への取り組みによって生じるメリット、デメリット、そして今後の課題を挙げる。

●メリット

- ①地域を、大手を振って資料調査ができる。
- ②大学の思惑として、宣伝等々ができる。
- ③卒業生、保護者が集まる場所が提供できる。
- ④新会員の募集を行うことができる。
- ⑤地域とのコミュニティーとも繋がることできる。

●デメリット

- ①意志決定がどうしても遅れがちになる。
- ②やりたいことができない場合もある。
- ③学内活動と比較して非常に費用が掛かる。
- ④学外での実施のため、学内関係者(学生、教職員)に対して展示成果を披露できない。

●今後の課題

- ①大学として、創立者に関係した大学史活動で

あれば、予算等の面において承認されやすいが、それ以外になると難しいという部分がある。その点に関してはきちんと「いや、この活動も必要なものである」と提案していく必要がある。

②資料の公開について、とくに専修大学では資料というものはほとんどが借用資料であることから、難しいという課題がある。さらに自前の資料においてもなかなか公開できない状況であることから、今後どうするかという課題もある。

《会場からの質疑応答》

Q 学生生活というものは、大学にとって中心となる存在ですが、展示の対象としては難しいのでは。

A 学生生活を対象にした展示は、おもに卒業生等の学内向け(サテライトキャンパス、ホームカミングデイ)として実施する際は、寮生活等、その方々に身近に感じてもらえるような時代と内容となる展示の工夫している。同様に、内部向け、外部向けにテーマを変えているものもある。また、対象の違いによって内容も変えている。

Q 費用対効果という問題について、どう評価すると考えているか。

A 効果をどこで計るのかについては、基本的に上にあげて計ってもらっている。共催展の実施にあたって、来場者数の予想を事前報告しているので、実際の来場者数と比較することで評価しているのではないかと。来場者数に関しては、これまで大幅な減少はない。地域での共催展として、高校生の来場はあまりない。もちろん地方展示の実施によって専修大学に入学していただければよいが、短いスパンでの費用対効果としては、来場者数や、メディアにどれだけ取り上げられたかが緊要の課題である。来場の対象者としては、学外においては学生を対象として考えていない。できるだけ地域の方、とくにそこに住む卒業生をおもな対象としており、実際に卒業生による見学ツアーによって来場してもらったり、企画展の開催にあわせて支部総会等を開催してもらっているので、卒業生の集いの場としては役立っているのではないかと考えている。

Q 地方展示においては共催展としての方法が

主であるが、予算に関してどのように配分し、負担しているのか。

A 展示に関する各機関との共催事業の費用は基本的に専修大学である程度持つ。その内訳は、資料の運搬が費用の大半を占めている。広告(新聞、バナー広告、看板)に関しては、その地元負担してもらっている。また、地方での展示ケース代、展示スペース代については、現地の博物館に負担してもらっている。ケースバイケースはあるが、基本的にはこのように実施している。

2. 報告②「戦争展と大学史資料」(早稲田大学) 望月 雅士氏(早稲田大学大学史資料センター)

《報告内容》

はじめに

1. 戦争展の取り組み
2. テーマ設定と資料蒐集
 - ① 趣旨
 - ② 戦争展のための大学史資料
 - ③ 戦没学徒の遺品状況
3. 遺品展批判
 - ① 遺品展スタイルの限界
 - ② 遺書と「直接対話」の危惧
4. 二つの視点
 - ① 大学に対する学生からの批判
 - ② 「彼らかく生き かく戦えり」
5. 事実の問題をめぐって
 - ① 正しい事実とは?
 - ② 「戦争犠牲者」数の問題

おわりに

(配布されたレジュメもとに筆者が作成)

(1)趣旨説明と遺品展示に関する課題

早稲田大学では、これまでに4回にわたって戦争展を開催してきた。本報告では、その一つである企画展「ペンから剣へー学徒出陣70年展一」⁶⁾を具体的事例として取り上げ、戦争遺品の展示をめぐる課題とその工夫についての取り組みが報告された。

まず、本企画展の趣旨を、「今回の企画展では、学業半ばで陸海軍に入隊し、戦場に逝った5人—高木多嘉雄・柳田喜一郎・吉村友男・近藤清・市島保男—を取り上げる。彼らの知性は戦争の時代といかに向き合い、格闘したのだろうか。彼らの軌跡を追うことから戦争の姿を改めて問い直し、不戦の誓いを新たにしたいと思う」とし⁷⁾、展示を通して5人の戦没学生に焦点を当てることにより、戦争のリアリティというものに近づこうとする試みがなされたが、そこで遺品をどう見せるのかという問題が出てきた。報告者によると、早稲田大学は戦時体制に積極的な大学であったことから、学生の中にも戦争に対する態度が受け身であったものばかりでなく、自発性を持っていたものも少なくなかった。

例えば、市島保男の遺書には、一部分に以下のような記載がある。

「今、国の危難に臨み身を以て護国の鬼と化する時、祖国の栄えを願う外、思い残す事は何もありません。御両親から頂いた儘の清い身心をその儘大君に奉り、桜花と共に南海の空に美事咲きます。」⁸⁾

この記載内容について、文面をそのまま展示することによって、今日の政治情勢と重ね合わせてストレートに受け取り、遺書と「直接対話」することが歴史から学ぶことと理解される傾向になることが危惧された。つまり、遺書と対話して英霊の国に殉じた気高さ、あるいは自己犠牲の尊さを学び、今を理解する、というように、展示品が捉えられる危惧があった。そこで、資料自体をどう捉え、展示するかが課題となったが、かりに遺書の中からこの危惧する部分を削除して展示をする、あるいはパネル化することになると、やはりオリジナルテキストを無視することになり、改変という批判を招く恐れがあった。そのため、遺品をそのまま展示することができるよう、次の2つの視点が設定された。

(2) 遺品展示に関する2つの視点の設定

1点目は、大学に対する学生からの批判の視点である。当時の早稲田大学は戦時体制に積極的であり、「田中穂積総長の指揮により、訓示、

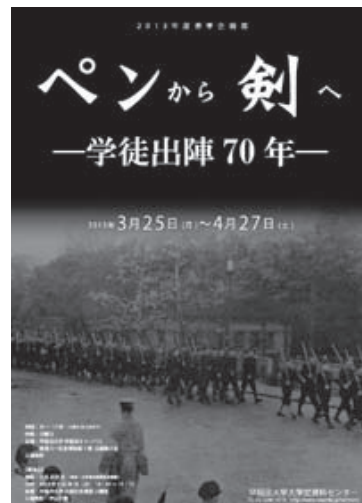
科外講義、映画上映、神社参拝、慰問、恤兵金など、戦時国策に直結した時局認識と戦意昂揚の育成を熱心に推し進めていった。1940年には国是即応・体力練磨・集団訓練を綱領とする学徒錬成部を設置し、新入生に向け智徳体兼備の人材錬成をはかったが、これは文部省に設立される国民錬成所の先駆けとなった」とされた⁹⁾。

こうした大学の動きに対する学生の反論について、以下の吉村友男氏の遺稿¹⁰⁾を取り上げ、大学への批判とする視点として展示した。

「クロオチェの偉いところは、学問を信じ多くの人のために尽くすということを考えていたことだと思います。学問の独立という言葉があるけれどもそれに徹するというはたいへんむずかしいことだと思います。クロオチェという人はほんとうにそれを信じそれを守った人でした。平和な時は空論も空論と見えないものだから、学問の独立というような言葉もずいぶん繁昌したけれども、現代のような異常な時代になると、空論なんか出る余地がなくなり、みんなあまりそういうことを言わなくなりました。もともと本気で言っていたわけではないでしょうからあたりまえだけれど、たいへん情けないことだと思います。

クロオチェの偉いところは、その議論というより、そういう時代にもなお、ビクともしない彼の学問的信念だと思います。」

(下線は筆者による追記)



企画展パンフレット

報告によると、文面的一部分に「学問の独立」という言葉があるが、これは痛烈な早稲田批判であるとの解説がなされた。つまり学問独立というものは、早稲田大学の建学の精神であり、一番のバックボーンとして存在しているからである。こういう戦争の時代にも関わらず、この学問独立がほとんど論じられなくなってきたことを吉村氏は批判し、それを展示内容に反映させた。

2点目は、「彼らかく生き かく戦えり」¹⁾として、戦没した5人の学生がどのような学生生活を送ったのか、そしてどういった戦闘をしたのかという視点である。これには学生のノートやアルバム、角帽、学生証や写真等を展示することで、当時の学生生活を紹介した。とくに写真に関しては、今でもごく一般的に行われる大隈銅像などの前での記念撮影等をなるべく多くパネルにして展示することで、学生生活は現在と70年前、全く違和感がない、変わりが無いということに気づいてもらえるような工夫をしたという。

そして、学生生活自体は今と変わらない彼らがどういったルートで戦地へ向かい、最後はどうであったのか、という説明の中に遺書を位置付け、現在そこから一人の戦死者も出していない戦後70年を認識してもらうことで、今回の企画展の趣旨に沿うものとした。

(3) 戦争展を通しての悲しみの共有

戦争展の開催によって出てくる悲しみの共有について、そこに日本とアメリカだけでなく、中国をはじめとするアジアの国々にも共通される問題ではないかとの指摘が報告者より出された。そして、この悲しみの共有という問題に対して、今後も戦争展を実施する中で、展示方法をどのように工夫していくかが課題だとした。

《会場からの質疑応答》

Q 戦争に対して学生は受け身であったばかりでなく自発性を持っていたものも少なくなかったと思います。実際の展示にそれを反映させるのは難しい側面があるかと思いますが、このような視点の必要性についてはどのように考えているのでしょうか。

A 戦争への自発性について、早稲田では志願者が多かったという状況だった。いろんな遺品を扱う中で、そのまま出すのは非常にためらわれるというか、誤解を招かれるものも数多くあった。それに対してどのようにしたらいいのか、というのが今回の報告だった。とくに早稲田ではアジアからの留学生が多いので、その方々からも見てもらえるような展示への工夫や、歴史観をいかに共有していくかが今後の課題である。

3. 報告③「展示を通しての自校史教育」(関西大学)

熊 博毅氏(関西大学学術情報事務局年史編纂室)

《報告内容》

- 年史資料展示室の場所
- 関西大学簡文館
- 年史資料展示室ができるまで
- 年史編纂室の移転と年史資料展示室の開設
- 2ヵ月で年史資料展示室の開設準備
- 常設展示室と企画展示室
- 見学者誘致への働きかけ
- 併設校(小・中・高)の授業支援
- 展示品作り
- 課題
- 展示を通じての大学史資料活用

(発表用パワーポイントをもとに筆者が作成)

関西大学は年史編纂終了後の1996年に大学会館内に年史資料の常設展を設置し、2006年簡文館内に年史資料展示室を開始する等、早くから展示に取り組んでいる。また来館者数に関して言えば、スプリングフェスティバル(ホームカミングデー)や教育委員会の総会、オープンキャンパス等、学外から多くの方々(おもに高校生や保護者、卒業生)が来館しているが、その他にも関係者向けに展示を活用した自校史教育にも取り組んでいる。

本報告では、展示を活用した自校史教育について、事例を取り上げて紹介し、さらに展示資料の収集に関する取り組みも紹介された。

(1) 展示を活用した自校史教育への取り組み¹²⁾

① 新入生の導入教育

毎年春、博物館と共同で新入生の導入教育の一環として、全学の教育職員に対して見学案内のチラシを配布し、見学者誘致の働きかけを行っている。その際教員から要望があれば、展示解説もそれぞれ実施している。

② 併設校へ出張授業

関西大学には初等部、中等部、高等学校があり、それぞれの学校から依頼を受け、出張授業を行っている。

例えば、初等部四年生の授業の中には「郷土の偉人を学ぶ」という単元があり、そこで関西大学の創立者の中で特に有名な児島惟謙を取り上げている。また中等部でも関西大学の歴史授業をしている。併設高校¹³⁾へはオープンキャンパスの一環として、大学の歴史を紹介している。

③ 新規採用事務職員への関大歴史の紹介

新規採用事務職員に対して毎年1時間、年史資料展示室の見学も含めて歴史の紹介を行っている。

(2) 展示を視野に入れた資料収集の取り組み

展示室が完成された後、企画展の実施に関して企画に見合った資料がなかなか見つからないという課題が出てきた。その解決方法として、関西大学では資料集において展示を視野に入れた活動を行っている。つまり、自らで将来の展示に備え展示物を作ろうという取り組みであり、理事長や学長、名誉教授等に資料提供を依頼し、大学の歴史として残すべき資料を確保している。例を挙げると、ある教員にご自身の書を残してほしい旨を伝え、書いてもらい、そしてその書を表装して掛け軸にして保存している。この取り組みはできる限り行っている。

また、広報課等が担当している講演会等でも、事前に広報課へ色紙を一箱ほど送り、著名人が来たらサインをしてもらうよう依頼することで資料収集を行っている。

その他、アスリートに対しても資料収集活動を意識的に行っている¹⁴⁾。これも例を挙げると、サッカー部が全日本大学選手権で優勝した時に

はゴールドのサッカーボールに出場選手全員の寄せ書きを書いてもらったり、またアメリカンフットボール部にも、出場した選手たちの寄せ書きをヘルメットに書いてもらったりして、展示候補の資料として収集している。この依頼に関する基準については、一定の実績を収めたということで線引きをしており、逆に資料が保存されていないところには、「もっと頑張ってもらいたい」というメッセージを含ませている。なお、アスリート関係への依頼は、スポーツ振興課という部署を通じて依頼している。

関西大学としては、「いずれにしても資料とか展示品というのは待っていても集まらない。ですから自分たちで展示品を作り出していこうという意識も必要」ではないかとの提案が出された。

(3) 今後の課題

2006年秋のオープン以来、常設展示室ではほとんど展示品の入れ替えをしていない。また展示室には比較的複製品よりも現物資料を展示している割合が非常に高く、すでに資料に対して大きなストレスがかかっている。さらに、変わりばえのない展示品は、来館者の増加につながらず、減少傾向にある。この問題については、今年度中の展示品の入れ替え作業によって解決を図っていくとした。

その他、関大K群というカリキュラム化された自校教育もあるが、そちらとの連携ができていないことも課題として挙げた。

《会場からの質疑応答》

Q 学生や教職員を対象にするだけでなく一般の方を対象にしたキャンパスツアーは定期的に行われているのか。案内については学生自らができるような環境作りが理想だと考えられるが。

A 入試・広報関係になるが、年間かなりの数を受け入れている。しかしコーディネーターは、入試課がオープンキャンパスの一環として行っている。社会人に対する案内は、来館された方に対し、各分担して行っている。

Q スポーツ関連の資料というと、選手のほかにコーチや監督、合宿所のスタッフの存在も重要

かと思われるが、そういった資料も集めるのは難しいのではないかと。

A 表に出てこない方々への資料収集というのは非常に難しく、正直出来ていないのが現状。それに対して活躍された方は、色んなかたちで、つまり記録だとかデータとかマスコミによるものとかによって分かるが、彼らを支えた人、裏方の人はやはりほとんど出ないため、難しいのが現状。

II. 総括討論における意見交換

3大学による報告の後、総括討論が行われ、なかでも2つの質問に関する意見交換が行われた。この内容は非常に示唆に富む内容であったため、ここに紹介する。

Q 大学史の展示の効果・有効性について、大学の経営戦略上、大学にとってどのようなプラス面があり、アーカイヴズの有効性をどのように考えているか。

専修大学 とくに地方展において、保護者が集まることができる場所を提供することができるプラス面がある。近年では寄付を納めてくれる卒業生の方が減ってきているが、若い方が入ってきてくれないというのも理由の一つかと思われる。こういう地方展は呼び水になるのではないだろうか。例えば鹿児島で開催したときは鹿児島支部だけでなく九州全支部が展示にあわせて集まってくれた。

また、石巻専修大学との共催の際には石巻専修大学をどうするのかといった大学の経営戦略にあてはめられた活動となった。これは同時に、我々の地方巡業での理由づけとなった。

早稲田大学 展示によるアピール効果を考えると、今回の企画展では新聞やテレビに取り上げられるケースが多く、学徒出陣展についてもかなり大きいスペースで取り上げられた。逆に、取り上げられるだけでなく、こちらからも各関係機関に対して早稲田大学に関する新聞記事をファックスで送ることで、各部署で我々が今どういった活動をしているかは伝わっている。

また、専修大学と同様、校友会の話になるが、各地の校友会より展示の依頼がある。例えば昨年では、戦争に関して松井栄三という野球部員に関する展示を出身地の浜松の校友会で昨年、今年と2回展示を行った。そしてそれをもとにして、8月にTBSで報道特集が組まれ、放送されたが、展示をきっかけとしてかなり広がりがあるというのを実感している。

関西大学 マスコミへの露出度というと残念ながらない。ただ、我々の活動は、卒業生に対して色んな意味で帰属意識を上げる効果がある。例えば、ホームカミングディや校友総会の際に、「学舎今昔物語」として、同じアングルから撮影した写真を校友課に提供し、校友課によって冊子かペーパーにして卒業生等関係者に配布するという方法によって校友の帰属意識への貢献が経営戦略上の効果として挙げられる。

それから、展示ということではないが、最近、広報課による学生向けの小冊子(毎月ほぼ月間に近い形で年間8回か9回発行)において、広報課との連携による「なるほどザ関大」というタイトルで原稿作成の協力を求められている。毎回、広報課がテーマを設定し、例えば今回の場合は大学祭というシーズンですので「大学祭を振り返ってみよう」ということで、それに関する質問を受けたり、写真を提供したりしている。これは私たちが原稿を書いて写真を構成する等という仕事ではなく、広報課で原稿を書いているので、こちらとしては1日何時間か話をするのと、写真を提供することが実際の仕事となっている。そういった資料提供が目に見えるかたちでの大学経営戦略上の有効性だと考えている。あと、戦略上の効果というと、やはり展示室を持っている、高校生が見学に来ることであるかと考えている。ただ、必ずしもそのことが関西大学への利益につながっているとは思っていない。やはり130年近い歴史と伝統を持つ大学であるというPRができてきているということが、それなりの効果となっているかと思っている。

先ほど、校友会との連携によって写真集を作成して卒業生に配布したと紹介したが、ホームカミングディ等で卒業生が何年か振りに来たとき

に「昔から残っているのは、ここだけだもんな」と、現存している昔の建物を見て懐かしがってくれてはいるが、現在の学内において当時の学舎がなくなりつつあり、50代、60代の卒業生にとっては建物が全然変わってきている。そこで、学内で関西大学歴史的開校モニュメント制作の提案をした。これは、当時の様子を説明したモニュメントによって、卒業生には「昔こういふ景色だったんだ」と懐かしんでもらい、現役の学生には大学の変化の様子を感じ取ってもらうことを目的としたものとなっている。

このようにして、関西大学の歴史と伝統というものを、どのように表現し、PRすることができるのかといったところが、年史編纂室の一つの存在を示すものであるかと思っている。

Q 展示の企画・趣旨をどのようにみているか。

専修大学 企画の趣旨について、大学としての趣旨は当然大々的に表に出している。ただ創立者の展示をしたときには、大学史の立場としては、きちんと大学以外の展示もしたいと思っており、その時代にきちんとあてはめて考えたいのだが、だからといって大学の名を出さずにそれをやっていいのかというと、大学としてはNGだろうと思う。そういった意味で考えれば、すくなくとも展示のタイトルに大学名の専修大学を当然入れることになるが、入れることによって来場者を狭めるんじゃないかという思いが常にある。つまり、入れることだけで、「専修大学か、じゃあいいや」と考えてしまう方も当然出てくるかと思う。出来れば我々は、そういったものを抜きにして見てもらいたいという思いがあるが、一方で大学の宣伝という側面もあり、これはある意味相反するものではないかということで、答えるのが難しい。趣旨としてはやはり大学の意図というものを表向きに出すということで、チラシ等で言葉として明記し作成していく必要はあるかと思う。

早稲田大学 今回の企画展ではパンフレットの「はじめに」というところで趣旨を書いているが、早稲田大学の趣旨を大学がどう考えるかについて踏まえながら、そこを資料センターとしてかなり協議し、自分たちがどう考えるかとして展示に

取り組んだ。先ほどのような過去に関する大学への批判ということとは、歴史部門だからこそできることではないかと思っている。

関西大学 展示企画の趣旨をまとめていくという段階になると、年史編纂委員会にて関西大学の歴史に関するものを全般的に協議・検討するかたちで事前に諮り、承認を得て展示を行っている。だからこそ、そこで承認されれば大学としての見解となっていると理解している。ただ、我々が企画しているのは、比較的近代というよりも現代というものを取り扱っているものがほとんどであるので、あまり具体的な歴史的評価が下せない。両論併記するとか、事実関係の記述でとどめているのが大半となっている。そのあたりが歴史研究者、歴史学者から言わせると、いやもう一歩踏み込むべきいふ意見があるのは当然だと思われるが、展示ということになると、はたしてそれをどの程度反映させるかというのがあるかと思われる。展示資料に対する説明としては、「現状はこういうものです。そして、それはこういった理由からここにあります。」という具合に行なっている。総括的な解説のパネルにおいては若干の記述はあるにしても、あまり深く踏み込んだ歴史評価を下した表現というのはいしていない。ただ全体としては大学の見解であると言えると思っている。

おわりに

以上、3大学による大学史資料の活用と展示をめぐる報告を紹介したが、専修大学は、自学に展示室がない、また収蔵資料がほとんどないという状況に対して、学内職員組織や、地域の自治体・博物館等との連携による共催展示という方法を取り、大学史活動の広がりの可能性を示唆した。早稲田大学は、展示の難しい戦争遺品に関する展示方法の課題と工夫点について、今年行った戦争展での取り組みを通じて紹介した。関西大学は、展示を活用した自校史教育の取り組みの紹介および資料収集に関するユニークな提案を出した。

報告の中で、展示品としての資料がないという問題を抱えている専修大学と関西大学の取り

組みが示唆に富んでいた。両大学はその解決方法として、他部署と連携することで資料収集に関する情報を得るなどしていた。つまり、専修大学においては校友会や育友会といった地域とのかかわりがある部署から情報を得たり、またそこを窓口として外部との連絡を図るなどの方法がとられ、関西大学は広報課やスポーツ振興課を通じて関大出身の著名人や教員、アスリートから資料を収集する方法がとられた。ここから、両大学が展示を視野に入れた資料収集の取り組みの中で、学内部署との連携を重視し、活用していることが分かる。

最後に、今回の報告を受け、記念センターの資料の活用と展示についての私見を以下述べることとする。

まず、センターの展示活動について、本学では常設展示室があるが、関西大学と同様、展示品の入れ替えを行っていない。このため、展示資料が受けるストレスを考慮に入れ、入れ替え作業を検討する必要がある。あわせて、本学では自校史教育も実施していることから、これを意識した展示や案内も工夫すべきである¹⁵⁾。

次に、専修大学が課題として取り上げた学内の認知度の問題に関しては、記念センターでも毎年出張展示会・講演会を実施している中で学内へのフィードバックの問題を抱えている。しかし、その問題に対して、今年度は初の試みとして本学のホームカミングディにて上演された「創立者本間喜一物語」とのタイアップ企画として過去の出張展示において創立者に関係した展示を再現することにより学内へのフィードバックを図ることができた¹⁶⁾。今後はこれをより発展させる工夫に取り組むことで、学内への認知度の向上に努めていく必要がある。

このほか専修大学が提案した共催展について、記念センターとしてはこれまで実施していない。そのため、当センター資料の広がりの可能性を見出すために今後検討する必要がある。

そして最後に、早稲田大学の事例のように、展示が難しい資料をいかに工夫して展示するかといった問題について、本学でも愛知大学史の展示室にて「愛大事件」や「山岳部薬師岳遭難

事故」という展示コーナーがあり、今回の早稲田大学の内容とは異なりつつも、展示の方法が問われる難しい問題としては共通しているかと思われる。本学も早稲田大学と同様、企画展といった展示等で、いかにしてある感情を観覧者と共有していくかといった取り組みは、今後必要ではないかと思われる。

注

- 1) 日本大学広報部大学史編纂課
- 2) 2005年度全国研究会(全国大学史資料協議会主催)
- 3) 2009年度全国研究会(全国大学史資料協議会主催)
- 4) この問題については、専修大学だけでなく、参加校のほか、多くの私立大学が抱えている問題であるとの指摘が報告者から出された。
- 5) 本企画展のチラシには、「東日本大震災発生以降、もっとも多く歌われたといわれる「故郷」のほか、「朧月夜」「春の小川」「紅葉」など、今なお多くの人々の心をひきつけてやまない唱歌や、専修大学および石巻専修大学をはじめ、全国100校を越す校歌の歌詞を手掛けた人物です。しかし彼の功績はそれだけではありません。文学・演劇・邦楽など日本文化の研究者としても大きな足跡を残しています。本展示は、震災によって甚大な被害を受けた東北地域の方々に、高野が後世に伝えようとした「日本の国土の美しさ」や「日本の文化」を紹介することで、故郷の復興を志す人々の思いの一助となることを願うものです。」と明記されている。
- 6) 会期:2013年3月25日～4月27日
会場:早稲田キャンパス2号館1階 會津八一記念博物館 企画展示室
- 7) 早稲田大学大学史資料センター(2013)『2013年度春季企画展ベンから剣へー学徒出陣70年一』、中表紙
- 8) 前掲7)、p.p. 7
- 9) 前掲7)、p.p. 8
- 10) 羽仁五郎『クロオチェ』(1939)を読んで(『新版 きけ わだつみのこえ』岩波文庫)、ただし前掲7)、p.p. 12から引用。

-
- 11) 澤地久枝『ミッドウェー海戦』、文芸春秋、1986年。ただし、発表用レジュメ『大学史における戦争展の試み』、p.p. 3から引用。
 - 12) なお、関西大学の自校史教育の取り組みについては、2010年度全国研究会におけるパネルディスカッションにて今回の報告者より若干紹介されている(『研究叢書 第12号』全国大学史資料協議会、p.p. 97-99)
 - 13) 関西大学第一高校、関西大学北陽高校、関西大学高等部を指している。
 - 14) 近年では大学に功績のあった人物・スポーツ選手など、さまざまな工夫を凝らした企画展を毎年開催している。
 - 15) 本学の自校史教育の試論として、藤田佳久「愛知大学自校史教育試論」(『愛知大学 文学論叢 第143輯』、愛知大学文学会、2011年)がある。
 - 16) アーカイヴズ展「米沢と本間喜一」
会期:2013年11月3日～11月30日
会場:愛知大学大学記念館

参考資料

- 瀬戸口龍一(2013)「地域と大学を結ぶ—大学史資料活用の広がりを探して—」パワーポイント資料
- 早稲田大学大学史資料センター(2013)『2013年度春季企画展ペンから剣へ—学徒出陣70年—』
- 望月雅士(2013)「大学史における戦争展の試み」発表用レジュメ
- 熊博毅(2013)「展示を通しての自校史教育」パワーポイント資料
- 全国大学史資料協議会(2007)『研究叢書 第7号』
- 全国大学史資料協議会(2010)『研究叢書 第11号』
- 全国大学史資料協議会(2011)『研究叢書 第12号』
- 藤田佳久(2011)「愛知大学自校史教育試論」、『愛知大学 文学論叢 第143輯』、愛知大学文学会、p.p. 13-38